

《原 著》

^{99m}Tc-標識製剤を用いた安静時心電図同期シンチグラムによる 不安定狭心症の診断精度と予後の推測に関する研究

西山 理* 上嶋 健治*

要旨〔目的〕不安定狭心症(UAP)の疑診例に心電図同期心筋 SPECT 検査(QGS)を行い、診断精度と入院期間中の予後を評価した。〔方法〕対象は UAP の疑診例で、CCU 入室直後に ^{99m}Tc-tetrofosmin で QGS を行い、かつ入院中に冠動脈造影(CAG)を施行した連続 57 症例で、SPECT 血流イメージから Defect score(DS)を用いて虚血の程度を 4 段階に、また機能イメージから局所壁運動異常の有無を視覚的に評価した。CAG の結果をもとに、1) 血流イメージ解析(P-解析)、2) 機能イメージ解析(F-解析)、3) P-解析と F-解析を加味する方法(P+F 正常；両解析がともに正常のみを虚血陰性、P+F 異常；両解析がともに異常のみを虚血陽性、P+F 複合；P-解析で DS が 2 未満でかつ F-解析で正常のみを虚血陰性)の、それぞれの精度を評価した。また入院中の転帰について検討した。〔結果〕35 例に有意冠動脈病変を認めた。P+F 複合が感度 83%、特異度 82%、と高精度であった。また、本法での陽性例は陰性例に比し早期に血行再建術を要した(45% vs. 8%)。〔結論〕QGS は UAP の診断と入院期間中の心事故の発生予測に有用である。

(核医学 41: 101-107, 2004)